

「人首町」 宮沢賢治 1924年3月25日

雪や雑木にあさひがふり  
丘のはざまのいっぽん町は  
あさましいまで光ってゐる  
そのうしろにはのっそり白い  
五輪峠のいたゞきで  
鉛の雲が湧きまた翔け  
南につゞく種山ヶ原のなだらは  
渦巻くひかりの霧でいっぱい  
つめたい風の合間から  
ひばりの声も聞こえてくるし  
やどり木のまりには艸くさいろのもあつて  
その梢から落ちるやうに飛ぶ鳥もある

「人首町下書き稿」

詩「人首町」には、下書き稿の(一)と(二)があります。それによると、宮沢賢治は菊慶旅館前から、人首橋周辺を散策し、そこから眺めた風景を記していることがわかります。例えば「下書き稿(二)」の場合は、次のような内容です。

人首町

一九二四・三・二五

- 丘のはざまのいっぽん町にあさひがふり  
雪や雑木があさましいまで光ってゐる  
……丘には杉の林もあれば  
黝くろ(あおくろ)い小さな鳥居もある……
- 5 広田湾から十八里  
水沢まで七里の道が  
けさつつくしく凍つてゐて  
藻類の行商人や  
税務署の濁蜜係り
- 10 みな藍靛(原文ママ)の影を引いて  
つぎつぎ町を出てくれれば  
「(一行不明) ↓遠い馬櫓の鈴もふるえる」  
「(一行不明) ↓削」  
まっ白な五輪峠のいたゞきで  
鉛の雲が湧きまた翔け
- 15 南につゞく種山ヶ原のなだらは  
渦巻くひかりの霧でいっぱい  
……あゝ朝の紺外套のかなしさ……  
「丘のはざまのこの町に ↓削」



20 「(数文字不明)の(数文字不明)↓削」

「菊井小兵衛酒を売り↓削」

「わずかに砂金を産する川は↓削」

「くるみと桑に覆われる↓削」

「こんな↓削除」つめたい風の合間から

25 「(二、三字不明)↓ひばり」の声も聞こえてくるし

やどり木のまりには艸いろのもあって

その梢から落ちるやうに飛ぶ鳥もある

以上のうち、ゴムで消してある20〜23行にはほぼ相当する次の四行が、7〜10行の下方余白に、鉛筆のきちんとした字で書かれ、ゴムで消されている  
13行の箇所に入挿する指定が付されている。

……「中学校のテニスの選手↓金龍館の昔のテナー」

菊井小兵衛は酒を売り

わづかに砂金を産する川は

くるみと桑に覆われる……

右に対して、鉛筆で次の手入れがなされている。

1行の前 「ナシ↓雪や雑木にあさひがふり」

1行 丘のはざまのいっぽん町「にあさひがふり↓は」

2行 「雪や雑木が↓削」あさましいまで光ってゐる

3〜12行 (この十行を削)

13行 (ここへ挿入されていた下方余白の四行を削除)

14行 「まっ白な↓そのうしろにはのっさり白い」五輪峠

「のいたゞきで↓削除↓五輪峠(原文ママ)のいたゞきで」

18行 (この行全体を削除)

(校本『宮澤賢治全集(第三巻)』より)

今回の取り組みで、案内板作成を担当した佐伯研二氏、「人首町」人首町  
下書き稿」の設置を快く許可していただいた家子和人氏・菊池隆紀氏に感謝  
申し上げます。また、設置の時にご協力いただいた千田義一氏、菊池隆紀氏、  
佐伯研二氏に多謝。

